

タイトル	人文学における「批判的思考」と「創造性」について
著者	テレングト, アイトル; TERENGUTO, Aitoru
引用	年報新入文学(20): 2-11
発行日	2023-12-25

人文学における「批判的思考」と 「創造性」について

テレングト・アイトル

20世紀末、アメリカを中心に人文学の教育改革において「Four Cs」フレームワークが打ち出され、今世紀に入ってから徐々に主流になってきたといつて良い。その四つの「C」とは、批判的思考力(Critical thinking)、コミュニケーション能力(Communication)、協調性(Collaboration)、創造性(Creativity)のことである。

現在、われわれの大学教育現場においても推進されるような傾向にある。その四つの「C」の「コミュニケーション能力」と「協調性」は、文学教育において重要なスキルだが、そのなかに必要不可欠なのは、「批判的思考力」と「創造性」であろう。紙幅の関係で「批判的思考力」と「創造性」のみを取り上げて吟味してみたい。

教育現場において、フレームワークの「批判的思考力」が作動するには、まず客観的な自己を確立し、客観的な基準のもとに考察や判断をすることが前提にするものである。だが、その際外向きの認識対象に対して作動する一方、それは同時に内省的思考力 (Self-reflective thinking)、あるいは内向きの自己批判的思考力 (Self-critical thinking) をも働かせることが要請される。批判的思考力とは、そういう二つの側面が含意され、外向きと内向きの両方に客観性が求められ、それを前提に批判し、省察し、洞察を遂行する思考力だと理解した方がより十全であろう。「創造性」というフレームワークは、想像力 (imagination)、独創性 (originality)、靈感 (inspiration)、革新性 (inventiveness) などが伴われるもので、それらに連動され、関連付けられる思考様式のことを指す。

実際、この二つのフレームワーク、あるいは思考様式は、何も21世紀に求められて新しく考案されたものではない。すでに古典古代から尊ばれてきたことであり、とりわけ大凡2800年前のホメロスを起源とされる英雄叙事詩においてすでに構想され、思考され、語られてきた思考様式のことである。もちろん、のちのソクラテスの対話を通じて、修辞学・詩学(文学)・論理学・哲学・政治・法律・宗教などの各分野においてより論理的、整合的に明確化され、展開されてきたが、とりわけ、デカルトやカントにおいて、人間の理性や認識の可能性と限界が吟味され明確化される作業・思考力として重要視されるようになり、普及されてきた。しかし、マルクス主義においては、事情がやや特殊で、批判的思考とは、既存のあらゆる支配的イデオロギーや体制・権力に対して批判・否定を加えるというスタンスが加味され、ややもすればネガティブな思考か危険な側面が含意されている。

それでは、現にわれわれを取り囲む人文学教育の現場において、この二つのフレームワーク・思考様

式について、いったいどのように理解し、受け止めるべきか、改めて検討が要請されよう。

文学教育の例を挙げてみると、批判的思考力とは、基礎となる表現の誤謬訂正の作業から修辭学的な表現や論理的な文章の吟味まで、さらに自律的な思考の作業や訓練のことを指す。それだけではとどまらない。とりわけ詩人・作家と共に作品を内面化し、自分自身と世界の再発見や再認識のしくみを身につけていく思考的作業やフレームワークに属するものでもある。実際、近現代において、そのフレームワークを呈示してくれる作品には、ルネサンス時代から現代までダンテの『神曲』やセルヴァンテスの『ドン・キホーテ』やシェイクスピアの『ハムレット』など数多くあり、そのなか日本の小説には夏名漱石の『吾輩は猫である』が挙げられる（とくに『吾輩は猫である』は、複眼的なパースペクティブの内面化と自己省察と思弁的な創造性においてうつつの傑作である）。

批判的思考力の起源となる典型的な例は、ホメロスの『イリアス』の冒頭一番で見出すことができる。例えば、ホメロスはまず自分を客観的な語り手の立ち位置（Objective narrative perspective）において語り始めるところが挙げられる。つまり、ホメロスはまず自分を自分の語る物語から切り離し、いわば省察（reflect）か自己省察（self-reflect）という「鏡」のような立ち位置（語り手）を獲得して、そこからムーサに呼びかけ、祈り、ムーサによって吹き込まれた物語を語る客観的な語り手として『イリアス』を語るのである。ホメロスは『イリアス』、『オデュッセイア』において、ムーサのリポーターを演じ、聴衆にとって客観的な立ち位置でムーサの記憶を語るという構造となり、そういう客観的なフレームワークから分け入った物語である（実際、物語はムーサのものではなく、ホメロスが語る物語だが）。そこで何よりもまずホメロスは「鏡」（reflection）として成立し、省察（reflect）し、映し出す役割を果

たし、そこで批判的思考力 (Critical thinking)・臨界的思考が作動するのである。M・H・エイブラムズの有名な比喻でいえば、それは「鏡とランプ」の関係にある。つまり、ホメロスの物語の冒頭一番の瞬間から読者は、ホメロスの導きによって『イリアス』の物語世界において複数の語り手と付き合うだけでなく、神々とも会話しながら複雑な神々と人間との絡み合うストーリーを遍歴し、批判・判断し、省察する。それが萌芽段階のものだが、そこで「省察的思考」や「批判的思考」が遂行され、高度な読者はそこで原初的思考を体験できるようになる。いわば、ホメロスは、「鏡」であり、その鏡によってムーサの語りのみならず、ホメロス自身をも映し出し、またアキレス、アガ멤ノン、ヘクトルなどの語り、さらに神々との交渉の語りが「合目的」に映され、「合理」的に省察され、批判されるが、読者もそれと共にその語られた語りを内面化し、省察し、批判し、熟考して、それらを学んでいくのである。ホメロスは単に他者の伝聞やムーサの言葉を伝えているのではない。それは人間のみならず、神々の物語、いわば臨場感に溢れる大いなる形而上学的かつ架空の「真実」の物語を、ホメロスとともに読者が合理的に受容できる一大スペクタクルになるが、そこでホメロスばかりか、読者ですら元来の自分から離れ、省察 (reflect/speculate) し、客観的な語り手の立ち位置を体験して物語を鑑賞し、批判 (critic) し、批評 (reflect) して、ホメロスと共に学んでいくことであろう。ここで重要なのはつまり、高度な読者はホメロスと共に、そういった自己を客観化し、ムーサの語りと登場人物を映・写・移 (reflect) しながら、地上から天界、天界から地上を往復するというパースペクティブを内面化し、それを自己省察 (self-reflect) と批評を行うことを体験し、共感し、それらを学ぶことであろう。そこで批判的思考は、省察的思考と切っても切れない相互依存関係にあり、あるいは自己省察が先立って成立されたパースペ

クタイプになるかもしれない。

文学教育において求められる「批判的思考力」とは、まずこのような物語を通じて、生々しくその認識の可能性と限界（臨界）を吟味し、認識の原初的批判性と省察性を自然に体験し、内面化することである。

もし以上は、当面、主として人間の外向きに作動した「批判的思考力」だとするならば、『オデュッセイ』の末尾の一例には、人間の内面世界、内向きの「批判的思考力」が発揮されているところが窺える。つまり、オデュッセウスは、驕慢の求婚者らに囲まれる妻のペネロペを目の当たりに何もできずにいることに悔み、夜眠れず、夢現のかたちで自分が自分の「こころ」と対話するところである。そこで自分のこころを「お前」と名指して叱ったり、批判したりする。さらに変身した女神が登場して話しかけてくるが、今度、オデュッセウスは、変身した女神と自分のこころとの間に立つて応酬し、慰めたり、勇気を奮い立たせたりするようになる。その場面でオデュッセウスは自分の内面世界に立ち戻り、自分と自分のこころと対話し、そのこころもそれに応答する。そして変身した女神が現れてくると、三者が対話するように変貌していく。ここで人間の原初的自己省察・自己批判・自己啓発的な思考が重層的に生き生きと語られ、読者は、ピュアなマインドに戻って素直にその内省的思考や自己啓発的な思考を体験することができる。

このように、ホメロスによって展開された人間と神々との一大架空の物語では、省察的・内省的・批判的思考がドラマティックに生き生きと再現される。それが萌芽的だが、系譜学的に継承され、のちのソクラテス、プラトン、アリストテレスらの対話や論説において精緻化される契機となる（ここでとく

に彼らいずれもホメロスを学んでその思考や教養を身につけ、事あるごとにホメロスを例に思弁的な思考を遂行していたことを忘れてはならない）が、その省察的・内省的な思考は、深い思弁的洞察へ導かれ、未知への探究において欠かすことのできないスキルになるのは言わずもがなのことであろう。

したがって、文学教育にとどまらず、人文学教育においても、ホメロスをはじめ、ソクラテス、プラトンなどを読み、その起源に触れることは、単なる古典を楽しみ、懐古に耽ることではない。むしろそれは人間思考の原初的なしくみを「教養」として身につけることである。もちろん、趣味・興味本位で読むのは自由だが、そもそも古来、文学はカタルシスや治癒の作用があり、読者にとって枯渇のない永遠の精神的な泉でもある。

ただし、ここで「批判的思考力」について改めて指摘せねばならないのは、19世紀半ばから20世紀にわたって（現在も浸透中だが）マルクスの政治経済学の批判原理に基づいた社会的闘争の実践的思考や、あるいは人間と人間との憎しみ合いを増幅させるイデオロギー的な批判に基づいた思考は、以上という「批判的思考力」（臨界的・可能性の探究の思考力）とは別だということである。しかし残念ながら、その許容範囲を峻別し、悪用してきた例を指摘するのは、単純なことではない。とくに教育現場において安易に汎用し、作者・作品・人間を批判・批評していくことに気をつけるべきことであろう。

そして、人文学における「創造性」についてだが、これは古典古代から二通りの考えがソクラテスとプラトンによって発展されてきたと言える。大まかにいうと、「創作性」にはミメーシス（芸術的な模倣）と、インスピレーション（芸術的な靈感）という二通りの思考的なフレームワークが想定されていた。前者は、アリストテレス的な展開によって、認識対象に対して、事実を確認し、模倣し、学習し、分類

し、その実相に迫るというプロセスをとることだが、文学・詩学においてそれは写実や模写、模倣を意味し、近現代文学においてリアリズムあるいは写実主義として展開され、その主眼はミメーシスをめぐって思考してきたと言える。そして、それがしばしば形式主義に陥りやすく、あるいは形骸化されていくにつれ、芸術文学の創造性・想像力の欠如や思考の貧弱・平凡さをもたらす傾向にある。後者は、そうではなく、最高の詩・文学は靈感によって創作されるもので、文学それ自体は、「自律」的なもので、特殊なマインド、特別な才能・啓示・靈感 (inspiration・神性とも訳す) によって生成されるものだという。この二通りの創造性に関する見方は、2500年前から互いに対峙し、依存し、拮抗してきた。その相互の依存関係、あるいはそのもつれ関係について、峻別するのは難しい。同じホメロスの例でいうと、ホメロスは『イリアス』の冒頭で、ミューズの女神に祈り、神性・靈感を呼びかけ、取り憑かれた状態で語り始めるのだが、そのような「秘儀」はホメロスのみならず、他の古典古代の作品にも見られる。例えば、プラトンの対話「イオン」などでソクラテスが言うには、英雄叙事詩や最高の文学は靈感・神性・直感 (intuition)・詩的狂気 (poetical madness) によって生成されるものだという。それはヨーロッパ的な思考の起源において一大伝統を成してきたが、それは日本の神話にも相通じる精神的、霊的な事象である。そして、プラトンの対話において詩的な創造力、あるいは「創造性」は、一方、ミメーシスや「テクニク」によるものであると主張され、他方、取り憑かれた霊によるか、あるいは真の「イデア」によって生成されるものだという。ただし、プラトンの対話においてそれらはいずれもさまざまな預言や寓話やアレゴリーや比喩や伝説によって語られてきたもので、残念ながらいまだに論理的な言葉で、理性のもとでかつ明確なかたちで証明か反証できた試しはなかったと言える。しかし、そうかといって、科学

や理性の名目で、人間のこころを揺さぶる靈感・靈魂 (spirit/soul) や神々の世界を無視できず、逆に古来それが思考の源泉として扱われ、あるいは求められて、それと拮抗しながら對話をし、ミメーシスやテクニクだけで人間のこころをきっぱりと解釈しようとはしなかった (極端なマテリアリズムを除けば)。現代的に言えば、敢えて人間内面世界の神秘性や未知の形而上学的な世界 (不可知論や無意識など) をリザーブしてきたことであろう。

以上のように、「批判的思考」と「創造性」というフレームワークは、人文学教育において複合的な要素が絡み合い、それが古典古代から受け継がれ、とくにソクラテス、プラトン、アリストテレスらによって洗練されてきたスキル・思考様式から始まったことがわかる。しかも、これらの思考のフレームワークの源流において、とりわけソクラテス・プラトンは、その行方をも示唆する。つまり、人間とは、自分の矛盾性・拮抗性を抱え「終焉」に向かうのを省察し、臨界的・批判的に對話 (ディアレクティク) し、探究し、発見しながら創造的に生きていくもので、かつその探究・発見とは、かつての人間自身が持ち合わせていた可能性と能力を存分に発揮することであり、それもまたインスピレーションによって生成され、かつ想起 (アナムネシス) されるものだとし唆する (それに相反して、後にアリストテレスは「生まれて来ないことが何よりも一番よいことなのである、だが (生まれて来たからには次善のこととして) 死んでしまう方が生きていることよりもまさっている」とも示唆する。これもまた臨界的・批判的かつ創造的なフレームワークに基づいて演繹され探求されていることであろう)。

総じて言えば、古代ギリシアから、とりわけルネサンス時代から人文学は、復興し啓蒙しようとした

思考様式・スキルの一つは、この「Critical thinking (批判的思考力)」＋「Reflective thinking (省察的思考力)」と、「Creativity (創造性)」＋「Inspiration (靈感)」であり、それに基づいて展開された思考の「教養」のことであり、かつそれは人間自体が本来持ちあわせていた可能性と能力のことであろう。具体的に文学教育において、言い換えるならば、そのフレームワーク・スキルは認知対象に対して、現実の世界ないし対象・素材を別のようなパースペクティブで思考できるように訓練することであり、自分自身から離れ、別の自分または別のパースペクティブを獲得して自分を思考し、省察することである。いわば、それは事実として目に見えるものではなく、思考上の数学(概念)的思考の探究のことを意味し、メタフィジカル的な思考を身につけることそれ自体を意味しているであろう。

実際、教育の現場で長く教えているうちに、いつの間にか学生の文学・詩の捉え方か、あるいは文学観が見えてくる。つまり、文学・詩それ自体を「自律」的な世界として見ているのか、それともそれが現実日常生活の素材の模写・書き写し・転写によつて構成され、もしくは文学を資本・市場・階級などの目的のために組成されたようなものとして見ているのか、そのどっちかに比重をおいてみているのか、学生らの世界の見方が違っていることが垣間見られるようになる。そして前者のパースペクティブに目覚めた学生は、どちらかといえば、事実や現象に問いかかけをし、内発的なモチベーションを保ち、好奇心と想像力にとみ、取り組みを続けていく傾向にあるが、後者はそうではないような傾向が強いということがにわかに判明してきたような気がする。

昨今、デジタル化・生成AI・量子力学などの急速な進展によって、人文学と教育は危機にさらされ、しいては教育全体が不透明な時代に突入してきたと言える。これから学生と共に、この不透明な時代を

どのように生きるかは、それぞれの取捨選択は自由だが、ただし、「Critical thinking（批判的思考力）」＋「Reflective thinking（省察的思考力）」と「Creativity（創造性）」＋「Inspiration（靈感）」に基づく「教養」を育むことは、今後人々が思考・探究を放棄しない限り、これからもそれは必須の基礎的前提条件になるフレームワークになるのではないかと考えられる。なぜなら、生成AIや量子力学などもこれらのフレームワークより出発し、拡張されてきたパースペクティブによる探究だからである。